

日本語学会 2024 年度春季大会シンポジウム報告

日時 2024 年 6 月 1 日（土） 13 時 00 分～17 時 30 分

場所 東京外国語大学 府中キャンパス アゴラ・グローバル プロメテウスホール

世界の日本語学

パネリスト：徐一平，曹英南，ダオ・ティ・ガア・ミー，ポリー・ザトラウスキー，ジャン・バザンテ，カラム・ハリール・サーレム

指定討論者：近藤 泰弘，木部 暢子

企画・司会：庵 功雄，太田 陽子，田中 祐輔

1. 本シンポジウムの趣旨

田中祐輔（筑波大学）

（1）学会創立 80 周年記念大会

2024 年 6 月 1 日・2 日に日本語学会創立 80 周年記念大会（大会企画運営委員会委員長・石黒圭／大会実行委員会委員長・川村大）が開催され、646 名の参加登録者を迎えた。大会ではワークショップ 4 件、口頭発表 23 件、オープン学生セッション 24 件、ポスター発表 8 件、さらに国際シンポジウム「世界の日本語学」が実施された。本稿では、国際シンポジウムについて報告する。

本シンポジウムは、日本語学会の創立 80 周年を記念して企画された国際シンポジウムである。世界における日本語学に着目すると、時々の日本語の諸相を捉える取り組みの歴史は長い。様々な国や地域において、文化理解や人々の交流、交易などに関連して、日本語を考察する試みが行われてきた。また、学問としての日本語学は、宗教や制度の導入時の言語把握、古典資料の解釈、各地域の言語的特色と社会基盤としての言語をめぐる議論の中で発展し、今日では多様な日本語話者や機械言語をも射程に入れた広範な研究領域を形成している。

（2）世界における日本語学の展開

1944 年の学会設立以降、国内における日本語学の発展は目覚ましく、海外での日本語研究も、日本語学にまつわる文献数を見ると、1980 年代から急速に増加している（図 1）。日本語学に関する文献は多言語で発表されており、英語、韓国語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、ベトナム語、アラビア語など

様々である。各国の日本語研究がどのように展開し、日本国内と国外の研究が互いにどのような影響を及ぼし合ってきたのかを振り返ることは意義深く、この 80 年の節目において、研究動向や新技術を取り入れた方法論、そして未来への展望を、国際的な視点から検討することは有益であると考えられる。そこで本シンポジウムでは、世界の日本語学の源流と発展、現状と未来を議論するために、中国、韓国、ベトナム、アメリカ、フランス、エジプトから専門家をお招きし、講演とパネルディスカッションを実施した。

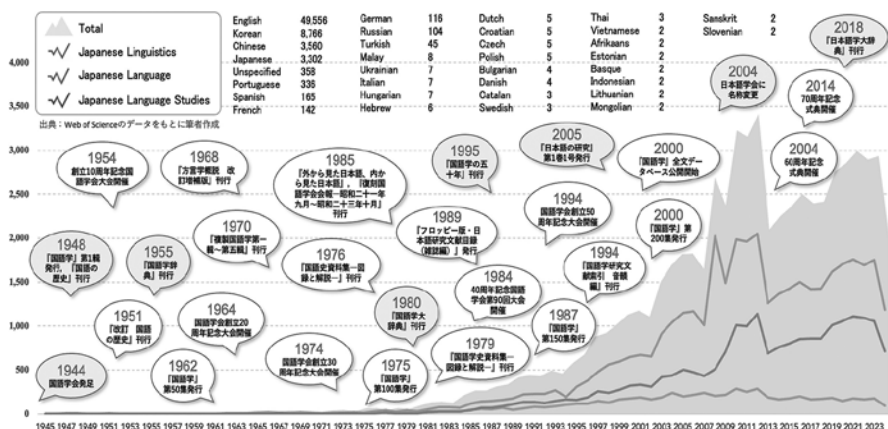


図 1 日本語関連文献数の推移と学会の主な出来事

(3) 各国における日本語学の過去と現在、世界の日本語学の展望

具体的には、ゲストパネリストより、各国や地域でどのような課題を背景に日本語学が発展し、どのような研究手法やテーマが生まれてきたか、また近年の新しい技術の導入により、辞典編纂、大規模調査、データベースやコーパスの構築を通じた国際的な共同研究がどのように広がっているかについてお話をいただいた。さらに、各国における日本語学の進展は、その国が日本の言語や文化、社会を理解し、共に対話を重ねてきた過程とも重なる。各講演では、これまで知られていなかった国々の日本理解や交流の新たな側面についても紹介され、人と人とのつながりと学術交流の歴史に新たな光が当てられた。パネルディスカッションでは、ゲストパネリスト、指定討論者、そして満席のフロア参加者との間で活発な議論が交わされた。世界の学協会が日本語学をめぐってどのように連携できるか、グローバルなジャーナル評価基準において日本語研究の国際化はどのような可能性があるか、人工知能などの新技術や環境の変化にどう対応すべきかが議論され、世界における日本語学の展望が示された。

2. 中国における日本語研究の歩み

徐一平（北京外国語大学）

はじめに、中国の日本語学科の発展と日本語研究界の基本構成を紹介した。1862年に北京大学の日本語専攻が成立されてから、1949年の新中国成立後、洛陽外国語学院、上海外国語学院、北京外国語学院などの大学でも、相次いで日本語専攻が設けられる。更に1972年に中日国交が正常化されると、社会人による日本語学習のブームも盛んになり、大学での日本語専攻も急激に増えて、現在ではおよそ500以上の大学に日本語専攻が設けられており、英語に次いで二番目に多い外国語教育の学科になっている。そのような状況の中で、1982年2月、「中国日語教学研究会」が成立。学会は団体会員制を実施し、およそ350の大学の日本語学部が会員になっている。更にその傘下に十幾つもの地方分会があり、全体の年次大会のほか、各地方分会もまた年次大会や非定期的なシンポジウムを開催し、全国各大学の日本語教師に日本語研究や日本文学研究のプラットフォームを提供している。他には「漢日対比語言学研究（協作）会」（2009年成立）、「日語偏誤と日語教学学会」（2014年成立）と各大学に付設されている研究所や研究センター（中には日本語研究や日本語教育研究を研究内容として設定しているものなど20機関ほどある）も、日本語研究界の基本構成の一部を担っている。

次に、中国における日本語研究の研究内容を振り返ってみた。具体的には、中国哲学社会科学基金で設けられている国家レベルの研究プロジェクト（いわゆる「科研費」）を通して、日本語研究の方向性を見てみた。1999年から2020年まで、認可された100件の日本語研究プロジェクトでは、対照研究：42件（日中対照研究：文法、語彙、輸入語彙、翻訳、日中韓、日中英、内モンゴル語と日語など）、日本語研究：25件（文法、語彙、文型、構文、文章、メタファーなど）、日本語教育研究：18件（教授法、習得、教材、教師育成など）、コーパスの構築：6件（中日対訳、学習者、翻訳、言語行為、中介語、漢字語彙など）、その他：9件（多言語辞書、佛教経典、歴史書類翻訳）になっている。更に、1980年代以降、各大学の日本語研究関係の博士課程で学位を取得した博士論文の内容から見ると、やはり対照研究が最も多い。次に、日本語の語彙、構文、表現、コミュニケーション、意味論などの研究も多く見られる。方法論としては、認知言語学や分散形態論など新しい研究理論に基づいた研究も見られている。

最後に、コンピュータ技術の発展に伴って進んできたコーパス研究の進展状況を紹介した。1999年に立案され、2003年7月に完成した『中日対訳コーパス』（CDROM）は世界初の日中対訳のパラレルコーパスである。中日両言語のデータを2,013万字も収録している。収録された文章の中で、最も多いのは小説で、ほかには詩歌、散文、伝記、論文、評論、法律、国会演説などがある。検索ツールとして、アラインメント作業とタグ付けを行った。それ以降、中日双方の日中対照研究の研究者や日本語研究者などに広

く利用され、その研究成果は、文法、語彙、翻訳、辞書編纂、通時の研究など多方面にわたっている。以来、中国国内でも、『中国日本語学習者コーパス』（CJLC）上海外国語大学、『日本語学習者作文コーパス』上海交通大学、『北京日本語学習者縦断コーパス』（B-JAS）国立国語研究所・北京日本学研究中心・北京師範大学、『湖南大学学習者中間言語コーパス』湖南大学・名古屋大学、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』日語偏誤研究と日語教学研究会など、いろいろな日本語研究や日本語教育に関連するコーパスが開発されてきた。

以上、中国における日本語研究の歩みから見て、次の二点を挙げる。

まず、日本以外の国や地域の日本語研究は、その国や地域における日本語教育との関係が密接にあると考えられる。中国における日本語研究も、80年代以降の日本語教育の発展と日本語学習者の増加に大きく関連している。

次に、日本の外から日本を見たときには、やはり自国の言語、文化の視点や、比較、対照の観点から研究を進めていくのが、より自然な切り口になる。その意味で、日本以外のほかの国と地域における研究者との連携も非常に重要になってくる。

今後の課題：若い世代は、より広く世界各国の日本語研究者との連携と交流を求めること。国内では、日本語研究以外の語学研究者（中国語、英語や諸外国語）との交流を強めること。

立ちはだかっている二大壁：いわゆる CSSCI 研究雑誌論文発表と科研費の取得。AI（人工知能）からの挑戦。

チャレンジとチャンスはいつも共存しているので、勇気を奮って邁進していきましょう。

3. 韓国における日本語学——その歴史的な歩みと展開——

曹英南（高麗大学）

韓国における日本語学の歴史的な歩みと展開について、時代的背景を探りながら考察し、その上で新たな展開について述べた。1948年に大韓民国が成立した後、韓国と日本の間には約20年間にわたる断絶期間があったが、1965年の日韓基本条約によって国交が正常化し、両国の関係は新たな局面を迎えた。特に1970年代以降、政治・経済・外交の分野で交流が進展した一方で、感情的なわだかまりが残っていたことも否めない。このような状況下で、日本に関連する学会を創立するには相当な決断力が必要であった。1973年2月1日、ソウル大学で韓国日本学会が創立され、これを機に日本語研究が本格化した。

1945年から1987年までの韓国人による「日本語学関連論文」299本をまとめた李鳳姫（1988）によると、1945年以降に日本語を扱った最初の論文は李崇寧氏が1955年に発表した「韓日両国の語彙比較試考——糞尿語を中心として——」であり、1945年から1972

年までに発表された論文は7本ある。1945年から1987年にかけて「文法」「語彙」「音声・音韻」などの分野で「比較・対照」を行った論文が44.4%と最も多く、次いで「文法」が23.4%,「教育」13.0%,「語彙」8.4%と続いている。

次に韓国日本学会の学術誌『日本学報』(1973年～2023年)に掲載されている日本語学に関する論文1,054本の分野を概観すると、以下のようにまとめられる。

- ① 1973年から1982年までの第1期には日本語学論文が14本あり、年1本ほどの掲載ペースである。この時期は「日本語史」と「日本語教育」が主なテーマを占めている。
- ② 1983年から1992年までの第2期には91本の論文が発表され、「文法」「日本語史」「日本語教育」「語彙・表現」「音声・音韻」「社会言語学・語用論」「文字・表記」の順に論文数が大幅に増加した。
- ③ 1993年から2002年までの第3期には288本の論文が発表され、政府による大学教員の業績評価制度の導入の影響(李康民2012)で、第2期に比べて大きく増加した。この時期は「文法」「日本語史」「日本語教育」「社会言語学・語用論」「語彙・表現」「音声・音韻」「文章・文体」の順で論文が発表されている。
- ④ 2003年から2012年までの第4期には、445本の論文が発表され、第3期よりさらに増加している。この増加は、1998年の政府による日本文化開放宣言と2001年に中学校で日本語が選択科目として採択されたことが影響している。これにより日本語教師の採用が急増し、日本語への関心が高まった。この時期は「文法」「日本語史」「日本語教育」「社会言語学・語用論」「語彙・表現」、そして「音声・音韻」および「通訳・翻訳」の順で論文が発表されている。
- ⑤ 2013年から2022年までの第5期は206本で、成長期の第3期に比べて減少している。この減少の原因の一つには大学院に進学する研究者の減少があると考えられる。分野別に見ると、「日本語教育」と「文法」が並んで1位を占めている。「日本語史」は3位だが、「社会言語学・語用論」と大差はない。その後に「語彙・表現」「通訳・翻訳」「音声・音韻」、そして「文章・文体」および「文字・表記」が続いている。
- ⑥ 2023年の状況を見ると、年間10本の論文が発表されているが、少子化の影響により、大学改革や学科の合併などが進行しているため、研究者数の縮小がさらに進んでいるのではないかと考えられる。

近年、特にAI時代に伴うデジタル人文学やコーパス言語学の発展により、日本語学の研究では、ますますデータ分析に基づいたアプローチが採用される可能性が高まっている。国家レベルでは知能情報産業のインフラ助成事業として進められてきたAI用学習データ(14分)が公開されている。日本語に関連するデータとしては「韓日の通訳・翻訳朗読体のデータ(2023)」「教育用韓国人の日本語音声データ(2023)」「観光地紹介

の日本語翻訳データ (2023)」「韓日翻訳コーパス (2021)」などがあり、これらのデータは対照研究や日本語教育の研究にも活用できると考えられる。

また、国際共同研究の重要性が増しており、特に中国や他国との言語比較に関する共同研究が進められている。YouTube やディズニースーパーヒーローの音声ガイドを用いた日韓間の比較研究など、新しいメディアを活用した研究も盛んに行われている。このような新しいデータソースの活用により、従来の枠組みにとらわれない革新的なアプローチによる研究が進んでいる。

4. ベトナムの日本語学——過去・現在・今後の展望——

ダオ・ティ・ガア・ミー (ハノイ国家大学)

ベトナムと日本の交流は 16 世紀から始まったがベトナムにおける日本語教育が本格的に始まったのは 1940 年代からだと言われている。当時、日本語は主にエリート層や華僑・フランス人が学んでおり、日本の施設で小規模な日本語クラスが開かれていた。1961 年にハノイ貿易大学で日本語講座が開設され、1973 年にはハノイ大学で日本語教育が開始されたものの、学習者は少なく、仕事の機会も限られていた。

1986 年にベトナムでドイモイ政策導入により、外国との関係が活発化し、1992 年に日本の対ベトナムの経済協力再開により、日本とベトナムの関係が一層改善されたことを受け、北部のハノイ国家大学外国語大学と南部のホーチミン市国家大学人文社会科学大学で日本語教育が開始された。2009 年の日越経済連携協定 (EPA) の締結を機に、日越間の交流の増加とともに、日本語ができる人材へのニーズが高まり、通訳、翻訳者のみならず、日本語が出来るエンジニアや他分野の専門家の養成も求められるようになり、日本語教育機関の範囲が拡大された。2003 年、日越両政府の合意により、中等教育機関で日本語が課外授業として導入された。また国民の外国語能力を引き上げるといいう外国語教育改革を目的とした「2008～2020 年期国家教育システムにおける外国語教育・学習プロジェクト」の一環で、2016 年から小学校で日本語教育が始まり、10 年間の学習で日本語レベル N3 相当の能力が身につくことが目標とされた。このように、両国の関係の深化により、両国の相互理解・貿易・経済・友好関係促進の基盤となる日本語研究への意欲も増し、日本語ブームを招いた。国際交流基金の 2021 年度の調査では、ベトナム全土に 629 か所の日本語教育機関があり、学習者数は約 169582 人で、世界 6 位である。

ベトナムにおける日本語学の研究動向をみると、グエン・タイン・タムら (2015) は研究テーマを①初期 (1970 年代～1990 年代前半)、② 1990 年代後半～2000 年代、そして③ 2000 年以降の 3 つの時期に分類している。①初期段階では教育現場で直面する課題 (漢字・音声・文法・作文等) が主要なテーマとして取り扱われた。② 1990 年代後半から 2000 年代にかけては、四技能テキスト編集や辞典編集などの研究が中心であったが、

③ 2000 年以降は、学問的なテキストの編集や学術論文の作成、発表が研究の主流となっている。

2000 年以前は、ベトナムにおいて日本語研究は少数であり、研究といっても、日本語の参考文献をもとに文法、文字語彙、漢字の特徴を簡単にまとめる程度であった。2000 年代に入ると日越友好関係の緊密化とともにベトナムにおける日本語学習者が急増しており、各大学で開催される国際シンポジウムでの研究成果の発表も盛んになった。2000 年以降の研究課題は以下の通りにまとめられる。

日本語を対象に行われる言語学の研究に関しては日本語の漢字や漢語、音声音韻、文法、語彙、慣用句などがある。研究例として、「日本語の漢字と漢字研究の歴史」「日本語における時制とベトナム語との対照」などが挙げられる。

個別研究分野の研究に関しては日本語とベトナム語の挨拶表現や「喜び」「怒り」の概念、ポライトネス理論に基づく研究が行われる。ジェンダーに関する研究も進んでおり、「日本語における男女の言葉の違い」といった研究テーマがある。

応用言語学の研究（日本語教区に関する研究）に関しては日本語学習者の急増や日本語教育機関の多様化とともに、日本語教育に関する研究が飛躍的に増加し、その研究テーマも学習者の言語習得、誤用分析、学習ストラテジー、教師・学習者のビリーフ、産学連携の可能性等、多岐にわたる。

Covid-19 の流行を契機に教育機関は IT、ICT の重要性を再認識した。それに伴い、オンライン授業支援システム開発や ICT を活用した教授法の開発が進んだ。この時期の研究テーマは ICT、オンライン教育、デジタル化、自動評価、アプリケーションなどに関連するキーワードが目立つ。

DX（デジタルトランスフォーメーション）の進展により、ベトナムの大学では ICT や AI を導入し、教育やマネジメントの質的向上を目指している。日本語教育においても、IT 人材や技術系人材の育成が重要視され、今後日本語教育機関と IT・技術系企業や大学との連携がさらに強化される見込みである。

Covid-19 及び円安の影響で、近年ベトナム人日本語学習者の増加率が低下し、日本語学習への熱意が若干減少しているが日本語教育の再活発化を図るためには魅力的な教育方法や効果的な日本語教育政策の導入が必要だと思われる。

5. アメリカにおける日本語の言語学

ポリリー・ザトラウスキー（ミネソタ大学）

アメリカにおける日本語の言語学専攻の教授と准教授 60 人に対し、研究動向等についてのアンケートを行い、3 割の回答を得た。回答結果を図 1「80 年のアメリカにおける日本語の言語学者——初代の教員と大学からの流れ」にまとめた。初代の始めの、網掛けで示した 2 人の言語学者のうち、NELSON（1892-1975）は、言語学に基づく日本語の漢

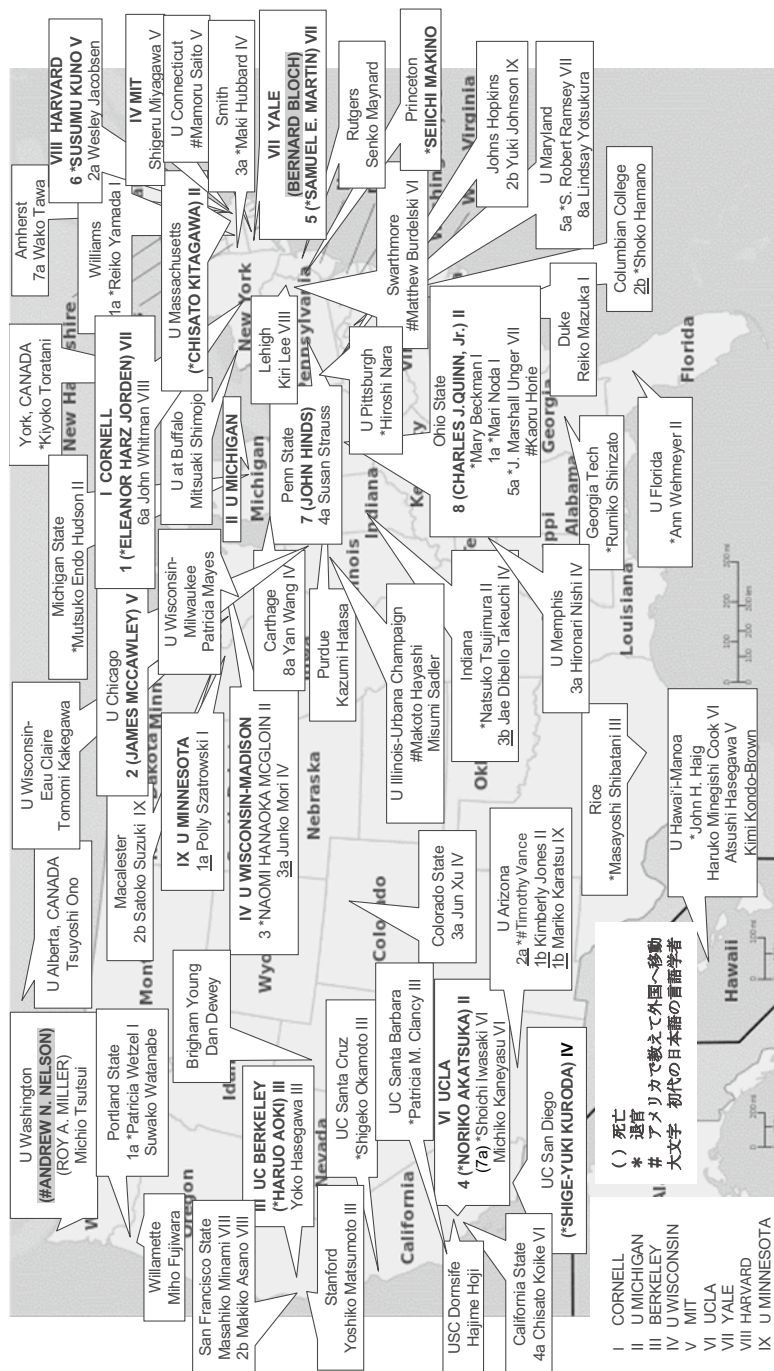


図1 80年のアメリカにおける日本語の言語学者——初代の教員と大学からの流れ

英辞典を作り、構造主義の Bloomfield の弟子だった BLOCH (1907-1965) は 1 JORDEN (1920-2009) と 5 MARTIN (1924-2009) の博士論文を指導し、大きな影響を与えている。図 1 に大文字の初代の教員名の左に 1~8 の数字を示し (弟子が多い順)、またその教員が指導した教員の左にその数字 + a で 2 代目、その数字 + b で 3 代目を示し、それぞれの教員の影響力が可視化されている。例えば、1 JORDEN は 1a で示した 4 人の日本語の言語学者を育て、さらにその弟子の 1 人 (1a) は、1b で示す 2 人を指導し、弟子と孫弟子を合わせ合計 6 人になる。MIT の変形文法の発案者である Chomsky の下で博士号を取得した 2 MCCAWLEY は、2a と 2a で示した 2 人の日本語の言語学者を育て、さらにその弟子はそれぞれ一人 (2b) と 3 人 (2b) を指導し、弟子と孫弟子で合計 6 人になる。このように初代の日本語の言語学者からの流れが見える。そのほか、指導教官が日本語の言語学者ではないが、I ~ IX (日本語の言語学の教員になった博士号取得数が多い順) と大文字で示す大学の言語学科からの流れもある。I ~ IX の大学で博士号を取得した教員名の右に、卒業した大学のローマ数字を示している。例えば I CORNELL, II U MICHIGAN, III BERKELEY, IV WISCONSIN-MADISON, それぞれで 6 人の教員が博士号を取得した。数字が付いていない教員は、弟子が少ないか、日本語の言語学の教員になった人数が少ない大学の出身者かまたはアンケートの回答がなかったからのいずれかである。その内 Rutgers の Maynard のように弟子は少ないが、業績はかなり優れている教員もいる。

本稿は 3 割しか回答がなかったアンケートのまとめであること、日本語教育を中心に研究している教員が対象外であること等、現実を反映していない面もある。今後どの大学でどの教員が博士課程で日本語の言語学者を育てるかによってアメリカにおける日本語の言語学が変わると考えられる。また、それ以外に研究方向に影響を与えることも考察する必要がある。

6. フランスにおける日本語学の展開史

ジャン・バザンテ (フランス国立東洋言語文化学院)

フランスにおける日本語学の起源は 19 世紀前半に遡る。その歴史は Garnier (1999) に従い、いくつかの時期に区分することができる。ここでは、字数の制約から各時期の主要な特徴を極めて簡潔に述べるにとどめるが、詳細については予稿集および参考文献を参照されたい。

第 1 期 (1825-1886 年) は日本語学の誕生期にあたり、最初の日本語研究は宣教師による文法書やシーボルトが持ち帰った書物に基づいて進められた。1863 年にレオン・ド・ロニー (Léon de Rosny) がフランス初の日本語講座を開講し、日本語学は独立した学問分野として確立された。しかし、ロニーの日本語研究は、口語から離れた文体を古代ギリシャ・ローマの枠組みで記述したものであり、学術的な価値というよりは、むしろ歴

史的な観点から重視される。

第2期(1886-1914年)には、辞書編纂と文法書の制作が進展し、特に口語文法の記述が重視された。1904年に刊行されたジャン＝マリ・ルマレシャル(Jean-Marie Lemaréchal)による大辞典は、この時期を代表する業績である。口語文法書の出版も活発に行われ、これらの文法書にはアストンやチェンバレンの研究に触発された新しい記述方法が採用された。以前に比べ、この時期の研究者たちは、日本語の特異性をより適切に捉えようと試みた点に特徴がある。

第3期(戦間期)には大きな進展は見られなかったが、ギュスターヴ・セスラン(Gustave Cesselin)による辞書は特筆すべき成果である。それ以来、並ぶもののなかったこの辞典は、2006年に、すずかわ書店より復刻版が刊行された。

第4期(1945-1970年)においては、シャルル・アグノエル(Charles Haguenauer)が中心的な役割を果たし、現代日本語の文法研究が進展した。特に、1951年の著書『Morphologie du japonais moderne』は、日本語の現代的な記述に大きな影響を与えた。

第5期(1970年代)には、自らをマルティネの弟子と称していたユベール・マエス(Hubert Maës)の尽力により、フランスにおける日本語学研究が本格的に始動した。彼は日本語の独自性を強調し、研究者グループを形成して、多くの研究成果を雑誌『Travaux du groupe de linguistique』に発表した。特に、彼が提唱した標準日本語用語のリストや音韻論の研究は注目された。マエスの死後も、彼の影響を受けた学者たちは、フランスにおける日本語学の発展を推進し続けた。

1980年代以降、日本語学は独立した分野として確立され、日本学および一般言語学に組み込まれた。パリ第7大学では、アントワヌ・クリオリのセミナーに多くの日本人学生が参加し、Travaux du groupe de linguistiqueに続いて同大学の形式言語学研究所は『Recherches en linguistique japonaise』を刊行した。また『Langages』や『Faits de langues』といった雑誌が日本語に関する特集号を発行した。フランス国立社会科学高等研究院(EHESS)は、イレヌ・タンバ(Irène Tamba)の指導のもとで日本語言語学の中心的研究機関となり、研究は多岐にわたって展開された。

特にローランス・ラブリュヌの歴史的音韻論の研究が注目された。また、翻訳研究や自然言語処理、専門用語のレキシコンも重要な分野となった。

Labrune(予定)の調査によれば、1902年から2023年の間にフランスで提出された日本語学および日本語教育学に関する博士論文は、121件に上る。最初の論文は1902年にエルネスト・エドワーズ氏によって提出され、日本の音声学の発展に影響を与えた(寺川喜四男:1964, 30-31)。1975年以降、論文数は急増し、1999年から2008年の10年間で41件が提出された。主な提出機関はパリ大学、ソルボンヌ新大学、EHESSであり、女性の博士号取得者が男性を上回る傾向が見られる。

現在フランスには約35名の日本語学研究者が活動しており、大半は「教職研究員

(enseignant-chercheur)」として教育と研究を兼務している。国立科学研究センター(CNRS)には3名が所属し、その他の研究者は名誉教授や講師などの立場で研究を行っている。彼らは言語学専門の研究所や学際的な研究所に所属しており、特に Cahiers de linguistique [言語学ノート] を著す東アジア言語研究所(Centre de recherches linguistiques sur l'Asie orientale)は、中国語や日本語などの東アジア言語に特化したヨーロッパ唯一の機関である。また、フランス東アジア研究所(Institut français de recherches sur l'Asie de l'Est)にはパリ・シテ大学と Inalco の研究員が所属している。日本語学および日本語教育が各大学のカリキュラムに組み込まれたことにより、今後、研究の質と量の向上が期待される。

現在の主要な研究テーマは、現役研究者の専門分野と深く関連しており、特に音韻学や音声学の分野が活発である。また、Thomas Pellard を中心とした琉球諸語の類型論やタイポロジー研究も進展している。さらに、言語コーパス、シンタクス、語用論、社会言語学(特にボライトネス)の研究も注目される分野である。近年の学術論文において(Couralet, Labruno & Shirota: 2024)、日本語をはじめとする世界の言語現象の仕組みを理解するために、西洋の言語学思考の支配的な立場やそれがもたらすバイアスが指摘されるとともに、日本語の言語事象を新たな視点で再考し、日本語独自の概念の重要性を再発見することが呼びかけられている。

7. エジプトの日本語学——途上段階における学習者世代変遷の分析——

カラム・ハリール・サーレム (カイロ大学)

エジプトにおける日本語学はいまだ発展途上にあります。カイロ大学日本語学科の設立は1974年、アフリカ中東では最古の日本語学科ですが、欧米やアジア圏の大学機関に比べると大変遅いスタートで、まとまった研究史もまだありません。

そこで本稿では、「エジプトの日本語学」を説明するにあたり、カイロ大学日本語学科設立当時の卒業生を「第一世代」、第一世代が指導した次世代を「第二世代」と仮に分類し、各世代ごとの特徴と傾向を分析します。

(1) 第一世代(1978~1987年学部卒業)

カイロ大学日本語学科創設当時に日本人教師にのみ指導を受けた、1978~1987年に学部を卒業した世代です。

この世代の最大の特徴は外国人向けの日本語教育専門家ではなく、中東研究専門家が指導をしていたため、「日本人が日本の基礎教育で学習する国語としての日本語」に大変近い形で日本語を学習していました。

この世代の大学院進学者は研究テーマに日本文学をはじめ思想、文化、歴史を選ぶ傾向にあり、エジプト人による日本語学そのものの研究はまだ始まっていません。

これは指導陣のほとんどが中東研究の専門家であり、日本語教育の専門家ではなかつ

たために、語学的な理解深化が研究にまでは及ばなかったと推測しています。

(2) 第二世代 (1988-1997 年学部卒業)

1990 年からカイロ大学において国際交流基金による日本語教育専門家の派遣が始まり、また第一世代が専任講師として後進の指導を始めました。

日本語教育専門家による効率的な指導、エジプト人講師による円滑なコミュニケーションで、日本語学習者が急増した世代です。

外国人向けの平易な用語で解説した日本語教授法で日本語文法の指導がエジプトにおける初中級学習者向け学習法のスタンダードとなります。

他に特筆すべき点としては、アラビア語で解説された日本語テキスト『アラブ人のための日本語』の発行があります。エジプト人と日本人の初の共著であり、他国との共同研究の第一歩となるものでした。

この世代では、文学よりも言語学を専攻する傾向にあります。日本人の日本語教育専門家常勤により、指導を受けやすいと考える院生が多かったのかもしれません。

実質的な「エジプトにおける日本語学」が始まった世代と推測できるでしょう。

(3) 第三世代 (1998-2007 年学部卒業)

第二世代が専任講師として教授する側に加わった世代です。カイロ大学の日本語・日本文学科と日本語翻訳学科の現両学科長はこの世代です。

この世代の顕著な出来事は、アイン・シャムス大学言語学部の日本語学科設立です。それに加え、第一世代が准教授に昇格し、シンポジウム開催や専門書出版が始まり、日本語教育と研究がエジプト人主導へと次第に移り変わった時代です。

本格的な共同研究はこの時代でようやく始まります。2005 年には日本人研究者との共著『日本語動詞練習帳』がエジプトで発行されました。2010 年カイロ大学日本語学科主催シンポジウムでは発表数 20 のうち、日本人研究者との共同発表が一例だけあり、分野はやはり言語学です。

しかしながら、大学院生以上の志望専攻は言語学研究希望が減り、文学、思想、歴史などのテーマが再び増えます。

文学専攻を主とした第一世代が指導教官を務めるようになり、アラビア語で記された日本文学についての著作や専攻研究が増えたために、文学部院生だけでなく言語学部院生にとっても文学専攻のほうが学位取得論文を書きやすい環境が整ったためと思われます。

(4) 第四世代 (2008 年学部卒業以降)

現在カイロ大学文学部日本語・日本文学科と日本語翻訳学科のそれぞれで学科長を務める第三世代が専任講師として加わった世代を、仮に第四世代と分類します。

第一世代を指導教官として文学、第二第三世代を指導教官として言語学を専攻する傾向にあり、比率は半々です。第一世代に多かった日本思想は研究者の後続が生まれず、

第四世代では現在専攻志望者がおりません。

日本のアニメ、マンガ、あるいはもっと漠然と韓国ドラマや K-pop から日本だけでなく極東アジア文化に興味をもった学習志望者が増えました。

この世代の一部は日本語学科入学前から、アニメ作品などで日本と極東の文化に比較的多く触れているので、第二、第三世代には理解の難しかったアジア独特の多神教的文化を最初から受け入れているようにも見えます。

以上のように「エジプトの日本語学」は途上段階にあり、歴史も短く研究史が始まっていません。強いて言えば、今回の発表のために作成したこの原稿が「エジプトにおける日本語学研究」の第一歩となるかもしれません。

現在の日本語教育の傾向としては、エジプト側主導で地方国立大と私立大で日本語学科設立が相次いでいます。1974年にカイロ大学で設立された時には、日本の中東諸国との友好関係構築を目的に積極的に行われ、多くの援助を日本側に頼っていたのとは対照的です。

もうひとつの新しい流れは、工学系大学内での日本語学科、日本語コースが求められていることです。日本語研究の側面的な需要が、両国間の友好関係構築から、実務現場で有益な語学教育に次第に変わりつつあります。

だからと言って日本文化理解の意欲が下がった訳ではありません。第四世代は日中韓のポップカルチャーから日本文化に興味をもち、かつインターネットで情報にアクセスしやすい環境にあります。中東人にありがちな異文化への抵抗が大変低く、この世代がエジプト人主導での日本文学・言語研究で大きく貢献し、他国との共同研究に参加できるレベルにエジプトの日本語学を押し上げられるのではないかと期待しています。

8. 日本語学の 80 年 理論（音韻・文法・語彙・文字）・日本語史研究

近藤泰弘（青山学院大学）

日本語学会の前身である国語学会は 1944 年（昭和 19 年）に設立された。初代会長の橋本進吉と東条操との強い協力関係があったことが重要な要因であった。そのため、国語史研究と方言研究は当初から、学会の重要な要素だった。また、戦後、橋本進吉をついで学会の中心となった、時枝誠記と遠藤嘉基は、いずれも国語教育・国語政策に強い関心があった。これらの要因によって、第二次世界大戦後の、国語学は、これらの研究を中核として始まった。しかし、1950 年代半ばから、国語教育には専門の学会ができたこともあり、国語学ではその分野はあまり扱われなくなった。また、言語学会が別に存在しているため、日本語の理論的な研究は、そちらと分担して行われているのも、日本語学の分野の特徴となっている。1948 年に、国立国語研究所が創設され、国語学会と連携しつつ、日本語研究の中心となっている。特に、当初の外国人に対する日本語教育の研究の導入、文化庁と連携した国語政策のシンクタンクとしての役割は重要であ

る。また、コンピュータを利用した日本語研究および方言の記述的研究については、設立当初から、学界をリードしており、現在に至っている。

国語学の世界の国際化は十分ではなかったが、1980 年代以降、国語学会が国際シンポジウムを折々に触れて開催したりしている。1984 年の学会 40 周年記念大会「外から見た日本語、内から見た日本語」、2004 年 60 周年記念大会「世界の日本語研究の新たな発展を求めて」などが注目される行事であった。2004 年に、国語学会は日本語学会に改称し、学問分野も「日本語学」と呼ばれることが増えたが、これも、この分野の研究の国際化を求める姿勢の一環であると言える。

次に理論的研究の各分野の状況について述べてみたい。音韻の研究は、1950 年代の構造主義言語学の影響が大きく、服部四郎の「モーラ」の理論を元にした二段階高低観によるアクセントの記述研究など、先端的な研究が行われてきている。近年では、国語研による話し言葉の音声コーパスの開発もこの分野に大きな影響を与えている。

文法の研究は、山田孝雄の「陳述論」と、時枝誠記の、「詞・辞」論とをどのように消化するかという形で進んだが、1970 年代になって、三上章が提唱していた「モード」が広く受け入れられるようになるに及んで、それらが、機能文法的な「モダリティ」論として合流した形になる。三上の「主語廃止論」も広く見れば、格支配よりも、文の機能的な側面を重視するという側面がある。これ以外には、金田一春彦によるアスペクト研究、南不二男の階層的文構造論などが、近年の大きな成果になっている。

語彙の研究の戦後の出発点は、国語研究所（林大）による『分類語彙表』（1964）である。この他、コンピュータによる各種語彙表が、国立国語研究所で作られた。また、小学館の『日本国語大辞典』の完成（1976）は、日本語の語彙の歴史の研究が世界的水準にあることを示したものである。また、国語研のコーパスの開発の中から、形態素解析用の電子辞書である UniDic が作られたことも影響は大きかった。通時的研究としては、阪倉篤義の『語構成の研究』（1966）前田富祺の『国語語彙史研究』（1985）などが、その後の方向性を決定した。

文字・表記の研究でも、戦後発表された『日本人の読み書き能力』（1951）は社会的に大きな意義があった。また、こちらの分野でも『現代雑誌九十種の用語用字』（1962～1964）など、国語研究所の成果は大きなものがあった。

日本語史研究では、新資料の発見・公開が続いた。『図書寮本類聚名義抄』の影印公開（1950）、『日葡辞書』の影印公開（1960）などはそれぞれ新しい研究分野を切り開いた。前者では、小松英雄による平声輕の声点の発見が画期的であった。その他にも、日本語と他の言語との対応を示す資料において、重要な進展があった。中田祝夫・築島裕・小林芳規等による訓点語・土井忠生等のキリシタン文献、柳田征司等の抄物・松村明等の洋学資料など新たな資料を用いた研究が増加した。また、現代語研究の成果を応用した文法研究の進展で、解釈文法からの脱却が図られた。

9. 方言研究・社会言語学的研究から見た 80 年

木部暢子（人間文化研究機構）

1. 方言研究・社会言語学的研究の歩み

近代の方言研究は、国語調査委員会の「音韻口語法取調」（1903）に始まる。その報告書『音韻調査報告書』『音韻分布図』（1905）、『口語法調査報告書』『口語法分布図』（1906）は、全国的な方言の状況を初めて明らかにした。日本の方言を東西に分ける境界線（後に「糸魚川・浜名湖線」と呼ばれる）が発見されたのもこの報告書がきっかけである。これを受け、東条操は方言の分裂の順序を地理的区画によって示すことを目的として、方言区画論を発表した（1927）。同じ頃、柳田国男は自身の方言収集の経験により「蝸牛考」を発表し（1927）、方言周圈論を提案した（1930）。以後、方言研究はこの2つの理論を柱として展開していく。

研究発表の場となったのが、雑誌『方言』（1931-38、春陽堂書店）と日本方言学会（1940年設立）、およびその機関誌『方言研究』（1940-44）である。同学会は『日本語のアクセント』（1942）、『国語アクセントの話』（1943）を刊行したが、1944年3月の国語学会の創立にあたり発展的解消を遂げた。その20年後の1964年（1963年とも）、会員制をとらない日本方言研究会が設立され、広く市民を巻きこんで方言研究が展開された。

1948年に設置された国立国語研究所は、八丈、鶴岡、岡崎などの地域言語の調査や各地方言の記述的調査研究を実施し、日本の方言研究を牽引した。また、『日本言語地図』全6巻（1966-1975）、『方言文法全国地図』全6巻（1989-2006）の刊行は、言語地理学の発展に大きく貢献した。

1960年代になると、言語を社会との関係で捉えようとする社会言語学がアメリカやイギリスで盛んになった。日本ではこれより早く、「言語生活」の名のもとに、国立国語研究所が社会言語学的調査を実施していたが、社会言語科学会が設立されたのは1998年である。学会誌では、コミュニケーション、ウエルフェア・リングイステクス、敬語、多言語社会、共生、コロナ禍などの特集が組まれた。

2. 現代における研究動向

1960年以降、中央の文化や標準語が各地に広まり、方言が大きく変容した。これにより、方言の世代差や標準語による方言の変容、および地域の言語・方言の消滅の問題がクローズアップされるようになった。1990年の日本方言研究会の研究発表会では、特集「方言の現在——今、方言はどう動きつつあるか——」が組まれ、「方言は消滅するのか」「地域言語の改新と世代差」「方言と標準語」などのテーマで議論が行われている。

言語・方言の消滅は、日本だけでなく世界的な問題である。ユネスコは、Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages（2003）や Moseley, Christopher (ed.)（2010）により消滅危機言語の保存・継承を訴えた。日本では、2010年に国立国語研究所に消滅

危機言語・危機方言の調査研究プロジェクトが設置され、各地の言語・方言の調査と継承活動を行っている。また、方言文法研究会では『全国方言文法辞典』の編纂を目指して『全国方言文法辞典資料集』を刊行し、現在、第8号に至っている。

危機言語・危機方言の継承活動にあらわれているように、近年は、方言研究者が地域活性化や災害復興などに積極的にかかわるようになった。阪神淡路大震災（1995）のときに、外国人に情報が伝わらなかったという反省から、佐藤和之氏らのグループが「やさしい日本語」の活動を始めたのが、このような活動の早い例で、東日本大震災（2011）のときには、方言によって被災後の地域の復興を支援する活動が行われた。また、医療・看護・福祉の現場で方言を活用する研究も行われている。

3. 新たな展開と今後の展望

将来的には、危機言語・危機方言の多くは生き延びることが難しい。だとすると、できるだけ多くの言語・方言を3点セット（辞書・文法書・談話テキスト）、音声、動画として記録し、そのデータをオープンアクセス化して、できるだけ多くの人が活用できるようにしなければならない。また、これらの記録を地域の人々と共同で進めることにより、方言研究がシチズンサイエンスの推進役となることが期待される。

これまでの日本の方言研究の最大の問題は、研究成果が世界に知られていないことである。これを改善するために、今後は過去の研究を含めて、研究成果の英語（またはそれ以外の外国語）での発信を推進する必要がある。国際発信に力を入れることにより、方言研究・社会言語学的研究に新しい展開が生まれるに違いない。

10. 質疑応答

太田陽子（一橋大学）

以上の講演を受け、全パネリストに指定討論者を加えてのディスカッションが行われた。ディスカッションに先立ち、会場参加者からそれぞれのパネリストに対して、紙面とオンラインフォームによる質問が数多く寄せられた。質問は、各パネリストの報告内容をふまえ、各国の日本語学研究における歴史的な展開を問うものをはじめ、現在の研究の動向や課題について各国特有の事情を掘り下げるものもあれば、国を越えた共通の問題意識を見出すものまで多岐に渡っていたが、会場では、後半のディスカッションへの足掛かりとして、次の一つの質問にしばって意見交換が行われた。

Q. 海外での日本語研究者がそれぞれの国の大学のプロモーションで苦勞なさっているという話を聞が、日本語学会として海外の日本語研究者にどのような応援ができるだろうか。（森山卓郎氏：早稲田大学）

現在は、国や学術分野を問わず、英語による論文、特にいわゆるトップジャーナルと

認定される媒体への掲載が重視されがちである。また、AIなどの技術革新により、英語以外の多様な外国語を自ら学習する意義が揺らぎかねないという話も聞かれる。そうしたなかで、「目に見える」形で研究成果を主張しにくい海外の日本語研究者に対し、日本語学会の果たすべき役割とは何かをともに考えるきっかけとなる質問であった。

これに対して、パネリストからは、各国それぞれの日本語研究者の置かれる立場の難しさに触れつつも、共通して、研究発表の場や研究者がつながる場が必要であることが述べられた。特に、国際共同研究がより活発になること（バザンテ教授）や、日本語に関する学会がこれまで以上に積極的に海外でも開催されること（カラム教授）など、より世界に開かれた研究活動が期待されていることが強い熱意をもって伝えられた。海外の日本語研究の関係者が、これからも研究を続け、それが正当に評価されていくために、学会がどのような役割を果たせるのかが問われている。

11. ディスカッション

庵功雄（一橋大学）

本シンポジウムの掉尾を飾る形で、指定討論者（木部教授と近藤教授）と全パネリストを交えたディスカッションが行われた。

まず、本シンポジウムが開催されたことの意義が海外のパネリストから述べられた。今回のような対面での開催によって、時差の関係などで本来は難しい、世界各地における日本語研究の「これまで」と「これから」を報告者が一堂に会した形で知ることができたことは素晴らしいことである旨が述べられた。

続いて、木部教授から、人間文化研究機構をはじめとする日本国内の研究機関において国際共同研究の推進を求める圧力が高まっている一方で、日本語学の分野ではそうした研究がまだまだあまり活発に行われていないという問題提起が行われた。それを受けてパネリストからは、そうした共同研究の「種」を見つける場所を作るという点からも、日本語学会の海外対面開催の検討を求める意見が出された。これに対し、近藤教授などからは、学会の海外開催を検討する一方で、それが難しい場合でも、オンラインを活かした共同研究を進めることは可能であろうという見解が示された。

最後に、各パネリストから本シンポジウムの総括が述べられた。その中では、各地域における日本語学の現状について、国の教育方針の影響を受ける部分があったり、AIの影響を考える必要があったり、国内における研究のプレゼンスを高める必要があったりといった課題がある一方で、コロナ禍を挟んで、インターネットやICTを活用した遠隔・非対面での研究が容易になり、それを活かした研究成果が見られつつあるといった今後の日本語学の発展の可能性を示す事例も紹介された。このようにして全パネリストが日本語学には多くの発展可能性が残されていることを確認し、シンポジウムを成功裏に閉じることができた。

参考文献

- 許海華（2008）近代中国日語教育之發端—同文館東文館《日語学习与研究》1
- ゲェン タイン タム・グイェン チ ツォン バン・マイ ゲェン ゴック（2015）『ベトナムにおける日本語教育と日本研究の動き』日越交流における歴史、社会、文化の諸課題シンポジウム（P.249-P.258）
- 国語学会編（1955）『国語学辞典』東京堂出版
- 国語学会編（1980）『国語学大辞典』東京堂出版
- 国語学会編（1985）『復刻 国語学会会報—昭和二十一年九月～昭和二十三年十月—』武蔵野書院
- 国語学会編（1995）『国語学の五十年』武蔵野書院
- 国語調査委員会（1905）『音韻調査報告書』『音韻分布図』日本書籍
- 国語調査委員会（1906）『口語法調査報告書』『口語法分布図』国定教科書共同販売所
- 国立国語研究所（1997）日本語文献目録 III：1091-1146
- シハープ・ファーリス編、シハープ・ファーリス、カラム・ハリール、阿部俊之著（2000）『アラブ人のための日本語』アフラーム新聞社
- 徐一平（1997）中国的日語研究与日語教育《日語学习与研究》4
- 徐一平・曹大峰（2002）《中日対訳語料庫の研制と応用研究論文集》外語教学与研究出版社
- 戴炜棟・胡文仲（2009）《中国外語教育發展研究（1949—2009）》上海外語教育出版社
- 田中祐輔（2015）『現代中国の日本語教育史』国書刊行会
- 寺川喜四男（1964）全ヨーロッパにおける日本語教育の歴史と現況、上巻、東京、法政大学出版局。
- デロワ中村、弥生（2020）“海外における日本語研究——欧米語圏を中心に——”『日本語の研究』第16巻2号、日本語学会
- 東条操（1927）『大日本方言地図・国語の方言区画』育英書院
- 日本方言學會編（1942）『日本語のアクセント』中央公論社
- 日本方言學會編（1943）『国語アクセントの話』春陽堂書店
- 日本語学会編（2014）『日本語学大辞典』東京堂出版
- 松田真希子（2017）『ベトナム人のための日本語・日本語教育研究——今後の展望と課題——』ハノイ国家大学外国語大学主催国際シンポジウム「ベトナムにおける日本研究と日本語教育——グローバル人材養成のための連携の可能性をめぐって——」での基調講演
- 柳田国男（1927）「蝸牛考」『人文雑誌』42(4), pp.125-135; 42(5), pp.162-172; 42(6), pp.223-233; 42(7), pp.273-284
- 柳田国男（1930）『蝸牛考』言語誌叢刊刀江書院版
- 吉田昌平、小田切由香子、アーデル・アミーン（2005）『日本語動詞練習帳』エルアラビーヤ・エルアラーム・エルクトブ出版社
- 吉田昌平、ハナーン・ラフィーク（2010）「The licensing of phonological empty categories in Arabic and Japanese」、カイロ大学文学部日本語・日本文学科創立35周年記念シンポジウム『エジプトにおける日本研究——過去、現在、未来——』
- 駱為竜、徐一平主編（1997）《中国的日本研究》社会科学文献出版社
- 李康民（2012）「한국에서의 일본어학 연구——현황과 과제——」『日本学報』91 韓国日本学会
- 李鳳姫（1988）『韓國에 있어서의 日本語學』『日本学報』20 韓国日本学会
- Akatsuka, Noriko. (1985) Conditionals and epistemic scale. *Language*, 61(3), 625-639.

- Akatsuka, Noriko. (1997) Towards a theory of desirability in conditional reasoning. *Japanese/Korean Linguistics*, 6, 41-58.
- Backnik, Jane M. & Charles J. Quinn (Ed.) (1994) *Situated meaning: Inside and outside in Japanese self, society, and language*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Frank, Bernard. (1981) *La japonologie – Histoire et définition d’une approche*. Les études japonaises en France *Le Japon vu depuis la France*. Les études japonaises en France, Tokyo, publications de la Maison franco-japonaise : 6-20.
- Cahiers de linguistique – Asie orientale, CRLAO, Paris.
- Cao Le Dung Chi (2017) 『ベトナムの外国語教育政策と日本語教育の展望』大阪大学博士論文
- Cesselin, Gustave (1940) *Dictionnaire japonais-français* [和仏大辞典], 横濱: 天主教教會.
- Cesselin, Gustave (2006 復刻版) アルヒーフ : すずさわ書店, 2365 ページ.
- Couralet, Stéphane, LABRUNE, Laurence and SHIROTA, Chieko (dir.), (2024) *Linguistique coréenne et japonaise: dynamiques croisées*, *Linguisticae*, Presses Universitaires de Bordeaux.
- Garnier, Catherine (1999) *La linguistique japonaise en France depuis 1825*. *Cipango* N°8, pp.259-283. (英語版 <https://journals.openedition.org/cjs/300>)
- Haguenauer, Charles (1951) *Morphologie du japonais moderne*, Paris, Librairie C. Klincksieck.
- Hinds, John. (1976) *Aspects of Japanese discourse structure*. Tokyo: Kaitakusha.
- Jorden, Eleanor Harz with Mari Noda. (1987, 1988, 1990) *Japanese: The spoken language* Part 1, 2, 3. New Haven, CT: Yale University Press.
- Kuno, Susumu. (1973) *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuno, Susumu (1987) *Functional syntax: Anaphora, discourse, and empathy*. Chicago: University of Chicago Press.
- Labrune, Laurence. (2012) *The phonology of Japanese*, Oxford University Press.
- Labrune, Laurence. (予定) *Un regard réflexif sur les thèses de linguistique et de didactique du japonais soutenues en France (1902 – 2023)*, *Japon Pluriel* 15, Paris, SFEJ.
- Lemarchal, Jean-Marie. (1904) *Dictionnaire japonais-français* [仏和大辞典], 東京三才社.
- Maës, Hubert. (1975) *La linguistique japonaise en France*, *Travaux du groupe de linguistique japonaise* vol.2., Université Paris VII.
- Martin, Samuel. (1975) *A reference grammar of Japanese*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Martin, Samuel. (1987) *The Japanese language through time*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Maynard, Senko K. (1989) *Japanese conversation – Self-contextualization through structure and interactional management*. Westport, CT: Praeger Publishers.
- Maynard, Senko K. (1993) *Discourse modality: Subjectivity, emotion and voice in the Japanese language*. Philadelphia, PA: John Benjamins.
- McCawley, James. (1968) *The phonological component of a grammar of Japanese*. The Hague, NL: Mouton.
- McGloin, Naomi Hanaoka. (1986) *Negation in Japanese*. Edmonton: Boreal Scholarly Publishers.
- Miller, Roy Andrew (Ed.) (1969) *Bernard Bloch on Japanese*. New Haven, CT: Yale University Press.
- (1975. 『ブロック日本語論考』林栄一監・訳, 研究者)
- Miller, Roy Andrew. (1967) *The Japanese language*. Tokyo: Charles E. Tuttle.
- Miller, Roy Andrew. (1971) *Japanese and the other Altaic languages*. Chicago: University of Chicago

Press.

- Moseley, Christopher (ed.) (2010) *Atlas of the World's Languages in Danger*, 3rd ed. Paris: UNESCO Publishing. Online version: <http://www.unesco.org/culture/en/endangeredlanguages/atlas>
- Mougin, Pascale and Pouillon, François (1995) *Langues'O : deux siècles d'histoire de l'École des langues orientales*, éd. Hervas.
- Nelson, Andrew N. & John H. Haig. (1997) *The new Nelson Japanese-English character dictionary*. Boston, MA: Tuttle Publishing.
- Patron, Sylvie (Ed.) (2014) *Toward a poetic theory of narration: Essays of S.-Y. Kuroda*. Berlin: de Gruyter Mouton.
- UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages (2003) *Language vitality and endangerment*. Document adopted by the International Expert Meeting on UNESCO Programmer Safeguarding of Endangered Languages Paris, 10–12 March.
- Unger, J. Marshall. [1977] (1993) *Studies in early Japanese morphophonemics*. Bloomington, IN: Indiana University Linguistics Club.
- Unger, J. Marshall. (2009) *The role of contact in the origins of the Japanese and Korean languages*. Honolulu, HI: University of Hawai i Press.
- Faits de Langues N°17 (2001) Raoul BLIN and Irène TAMBA 編 coréen-japonais. Paris, Ophrys.
- Langages N°68 (1982) André WLODARCZYK 編. *La linguistique japonaise*, Paris, Armand Colin (Larousse).
- Recherches en linguistique japonaise, Laboratoire de linguistique formelle, Université de Paris 7.
- 1.Linguistique japonaise 1 (1984)
 - 2.Linguistique japonaise 2 (1988)
 - 3.La nominalisation (1992)
- Travaux du groupe de linguistique japonaise (1975-1977) Hubert Maës 編. Paris, Université de Paris VII-Asiathèque.
- 1.Problèmes terminologiques (1975)
 - 2.Histoire de la linguistique, morpho-syntaxe (1975)
 - 3.Présentation syntaxique du japonais standard (1976)
 - 4.Recherche en syntaxe (1977)